

哀れみと親密圏

名古屋産業大学 高橋 陽子

1 目的

この報告の目的は、ユダヤ人であるという出自が、アーレントにとって重大な意味をもっていたという認識の上に立って、彼女が用いる概念の解釈を試みるものである。ここで、特に着目するのは、「哀れみ」と「親密圏」である。これらの概念を明確にすることによって、『全体主義の起原』の思想的展開として、その後のアーレントの著作を位置づけることを目指す。

2 方法

そこで、親密圏の具体例としてアーレントが位置づけている、サロンについての叙述を引用する。

社会はユダヤ人ではなく、ユダヤ民族の例外者——例外ユダヤ人——に対してのみサロンの扉を開いたのである。…
…社会が要求したのは、彼らが自分らと同じ〈教養〉を持ちながら（普通のユダヤ人）として自分らと異なる行動をすること、しかも普通の人間であるかのようにではなく、何か少々普通でないものであるかのように——何と言っても彼らはやはりユダヤ人なのだから——行動することだった。（Arendt 1994:56=2004:105）

『全体主義の起原 1 反ユダヤ主義』における、この親密圏の描写は、『人間の条件』では次のように展開される。

活動の可能性を排除している代わりに、社会は、それぞれの成員にある種の行動を期待し、無数の多様な規則を押しつける。そしてこれらの規則はすべてその成員を「正常化」し、彼らを行動させ、自発的な活動や優れた成果を排除する傾向をもつ。ルソーとともに私たちは、このような要求を上流社会のサロンに見る。（Arendt 1998:40-41=2006:64）

そして『革命について』における記述では、アーレントは、この親密圏に活力を与えた感傷が哀れみであるとしている。（Arendt 2006:78=2005:132）

3 結果

これらの引用から、親密圏を支配していた情緒が哀れみであることが明らかとなる。この哀れみという感情は、見下した気持ちを内包し、次のような状況をもたらした。

徳の源泉と考えられた哀れみは、残酷さそのものよりも残酷になる能力を持っていることを証明している。（Arendt 2006:79=2005:133）

哀れみの残酷さは、全体主義体制下では次のような心性となって現れた。「〈殺害〉という言葉のかわりに〈慈悲によって死なせる〉」という言葉が用いられ、「許すべからざる罪は人々を殺すことではなく不必要な痛みを与えることだ」（Arendt 2006:108-109=2006:86）とすり替えられ、哀れみは良心を麻痺させる機能を果たしたのである。

4 結論

以上から、アーレントの思想的萌芽が、『全体主義の起原』に見られることが明らかとなる。

文献

Arendt, Hannah, 1994, "The Origins of Totalitarianism". (=2004, 大久保和郎・大島かおり訳『全体主義の起原』みすず書房.)